江陽小

主体的に学ぶ児童の育成

～問題解決の意欲を持続させるための「しかけ」と「発問」の工夫～

（３年計画の２年次）

校長　　三津谷　喜美典

１　研究主題について

令和３年度の研究主題「確かな学力を育てる授業づくり～児童が表現したくなる『しかけ』と『発問』の工夫」の実践についてのアンケートでは、導入で、課題提示や発問・指示を工夫することで、児童が自ら問題を発見することができたという意見が９０％だった。実際、導入の場面で、児童が、「あれ？」「どうして？」「今までとちがう。」「このままではできない。」「どうすればいいの？」など、課題を自分ごととしてとらえる姿が見られた。また、本時の目標に迫る場面で意欲や活動が停滞することが多いという一昨年度の課題を受けて、授業全体を通して児童の主体性が持続するような「しかけ」の工夫や、効果的にしかける場面選びについて、指導者が意識するようになった。

しかし、展開で、児童が話したくなる「しかけ」を発問に取り入れたり、場面を選んで効果的にしかけたりする実践は、十分とは言えなかった。

そこで今年度は、問題解決の意欲を持続させることに重点を置いて研究を深めることとした。昨年度に引き続き、導入では、課題提示や発問・指示を工夫することで、児童が自ら問題を発見できるようにし、全体でそれを共有させる。展開では、児童が進んで考えたくなる流れを工夫し、問題解決の意欲を持続させる。それによって、これまで身に付けた「見方・考え方」を働かせて課題解決に向かい、最後までやり遂げようとする児童を育てることができると考える。このような授業を重ねることで、主体的に学ぶ児童を育成していきたい。

２　研究のねらい

問いをもち、最後まで児童の問題解決の意欲が持続するような「しかけ」と「発問」の工夫について、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

(1) 導入で、児童の知的好奇心を刺激し問いを引き出す「しかけ」を工夫することで、児童が課題を自分ごととしてとらえることができる。

(2) 展開で、児童が進んで考えたくなる流れを工夫することで、問題解決の意欲を持続させることができる。

４　研究内容

(1) 問いの意識をもたせる、課題提示や発問・指示の工夫。

(2) 問題解決の意欲を持続させるための展開時における働きかけの工夫や場面の選択。

５　研究の経過

(1) 研究仮設に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
7	6	第１回授業研究（２学年） 「かさ」 授業者　花岡　梨紗　教諭	バケツの水のかさの量をペットボトル何本分で計量し、間違った演示によって、正確に測定する必要性を引き出した。水に色をつけて具体物を用いた学習は児童の学習意欲の継続につながった。
9	２１	第２回授業研究（要請訪問４学年） 「式と計算のじゅんじょ」 授業者　高橋　由香　教諭 　　松橋　淳子　教諭 講師　　総合教育センター 　　副所長　松橋　祐哉　氏	整然と並んだ石の図を式で表し、図と結び付けながら説明する活動を行った。クイズを出題したり、解答したりする学習形態を取り入れることで問題解決の意欲を持続させることができた。

(2) 一般研修

月	日	内容等
4	２７	児童理解・生徒指導情報交換
6	1	江陽中学校区ジョイントスクール研修会（江陽中での授業をオンライン参観）
7	２１	Q-U アンケートの見方と活用について　講師：こども支援センター 教育相談員　原　寿　氏
9	２８	１人１台端末の授業での活用について　講師：総合教育センター 主任指導主事　石井　一二三　氏
１１	9	江陽中学校区ジョイントスクール研修会（江陽小での情報交換）

６　研究の成果

(1) 導入時に、問い返しや立場表明、具体物を用いた提示など、課題提示の工夫を行ったことで、児童が課題を自分ごととして捉え、問いをもたせる授業を積み重ねることができた。

(2) 展開時に、クイズ大会や間違った演示、問い返し等の働きかけを行ったことで、児童が自分の考えを深め、課題の解決場面まで意欲を持続して学習することができた。振り返りの内容にも思考の深まりや自己の成長に気付く姿が見られた。

(3) 問題を全体で把握し、めあてを共有するという導入時のしかけが日常化してきたことで、学習への取り組みやすさや安心感などのよい雰囲気を作ることができた。

７　研究の課題

(1) 導入時・展開時ともに、しかけを毎時間考え展開させることは難しい。しかけの日常化のためには、それぞれに実践を積み重ね、共有する場を設ける必要がある。

(2) 児童の聞く力・話す力を高めるための場の設定や、特別な支援を要する児童への配慮を加味した働きかけを意識する必要がある。

〈記入者　横内　真樹子〉